

## 仙台・青葉まつり（すずめ踊り）における 地域文化と世代間交流の立場から

BRIDAL PLANNER STAGE 代表取締役

青葉組踊り部会長 平賀 ノブ

### 1. すずめ踊りの由来

仙台のすずめ踊りは、慶長8年（1603）、仙台城移徙式（新築移転の儀式）の宴席で泉州・堺（現在の大阪府堺市）からきていた石工たちが、即興で披露した踊りにはじまるといわれている。西国らしい小気味よいテンポ、躍動感あふれる身振り、伊達家の家紋が「竹に雀」であったこと、はね踊る姿が餅をついばむ雀の姿に似ていることから「すずめ踊り」と名付けられ、長く伝えられることとなる。

戦前までは石切町（現在の八幡町）の石工たちによって踊り継がれ、毎年、大崎八幡神社の祭礼には「すずめ踊り」を奉納するのが通例となっていた。しかし、戦後は「すずめ踊り」も次第に継承者を失い、同町石切神社にてわずかに残った石工にひっそりと受け継がれるだけとなった。

### 2. 仙台・青葉まつりの由来

仙台・青葉まつりは承応4年（1655）にはじまり、毎年9月17日に行われた東照宮の祭りで藩をあげて行われ最大70基の山鉾が城下を練り歩いた。明治時代になると、これにかわって伊達政宗を祀って明治7年にできた青葉神社の礼祭（政宗の命日である5月24日に行われ、青葉祭りとも呼ばれた）が盛大に行われた。特に明治18年の政宗公没後250年祭や昭和10年の300年祭には多くの山鉾が市中に出て盛大に執り行われた。しかし、昭和40年代後半、交通事情により一朝途絶えることになるが、350年祭を迎えた昭和60年に『青葉まつり』が再び市民の祭りとして復活し、現在では仙台3大祭り（仙台七夕まつり：仙台・青葉まつり：SENDAI・光のページェント）の一つとして市民の間に定着する。

### 3. すずめ踊りの継承と世代間交流

仙台・青葉まつりでは、途絶えかけた伝統を守るために、伝承者黒田虎男氏（黒田石材店）の指導を仰ぎ「すずめ踊り」を復元し、昭和62年より『仙台すずめ踊り』としてコンテストや講習会を開き、すずめ踊りの伝承・普及に力を注ぎ、『仙台すずめ踊り』は「すずめ踊り」の原型をとどめつつ、老若男女一緒に自由に楽しめるよう練り直され、市民参加型の祭りとして現在定着している。

なお、地域の活性化は、町の顔であり元気なことが一番。そこで『まつりは市民のもの』『市民参加型』を趣旨に、市民あげて「観て楽しむ、参加して楽しむ、歴史・文化を楽しむ」を掲げ、地域文化に触れ世代間交流を図りながら、すずめ踊り部会では、更に、「子すずめ踊り」（小学生のみ）、「流し踊り」「舞台踊り」（2つは年齢性別問わず）の3部門を設け、町内・グループ・親子・障害者・高齢者、「誰でもが参加できる」よう試みたことが年々増え、平成15年の参加団体は80団体で参加人数は3,300人、観衆は2日間で約80万人に達し、仙台・青葉まつりに「すずめ踊り」は今や欠かせない存在となる。